

忘れ得ぬ想い出

スペイン・カナリア諸島の

日本人学校へ（下）

234

大井誠一郎さん（四七）



フィエスタには日本のお祭りを再現



学芸会で合唱を

外国人の子弟も受け入れて授業に苦心 現地校と学年ごとに盛んな交流

昭和五十五年に大井さんが赴任したスペイン・ラスバルマス日本人学校はスペイン本土から約千百人離れた大西洋に浮かぶカナリーア諸島にあつた。諸島は古に火山の噴火によってできた七つの島から成っている。南にアフリカ大陸、北に地中海を控え、しかも四方を海に囲まれているので、それらが複雑に影響し合って、一年を通じて気温、四季の変化が少なく、風向によって天気が変わる。島の南側や海岸近くの低地では雨量が乏しい、などの気候の特徴がある。

ラスバルマスのあるグランカナリア島は一枚貝に似た円形の形をしていることから「貝殻島」とも呼ばれている。島の中央部から北西部にかけては千三百㍍から千五百㍍級の山が連なり、島の気候に大きな影響を与えている。島の歴史は水不足との戦いの歴史でもあり、いくつかある川も「水なし川」で冬の雨の多い時期にわずかに流れれる程度。そのため、グランカナリアには二百以上の井戸があり、

深さは二百㍍にも達しているが、その井戸さえ枯れることも多く、必要量を全部まかない切れない。加えて主な水源は個人の所有になつていて、使用料を払って水の分配を受けるほどで「命の水」といわれるほど大切になっている。そのため、断水があると暴動が二週間も続くことがある。

「水道水も掃除や洗濯、風呂に使えるぐらいで飲用には適さない。高いミネラルウォーターや安い炭酸水をわかして飲んでいました」という。

大井さんはこの島で双子のお子さんに恵まれた。しかし、育児に関する品物が不足して苦労した。

「ミルクは急ぐものは航空便で取り寄せました。一万五千円もかかるんです。肌着もナイロン製はあっても綿製品がないのでこれも日本から送つてもらいました」

幸い病気やけがはなかったものの、盲腸の手術が成功しても乾杯するというほど医療技術の水準も低かった。少ない水を利用してトマトやス

イカ、ジャガイモなどを栽培しているが日本人の口には合わなかつたという。幸い、バレンシア米という国産の米があつて、海産物と一緒に煮るパエリ亞という料理を楽しんだ。ところが、このパレシシア米、水もちが悪くて時間がたつとまずくなるそう。

「食い放題の軽食堂の店が“タベルナ”、メニューにある“バカコン

アホ”はニンニク入りの牛肉といふ意味。最初はびっくりしました」スペイン語と日本語の違いから出たユーモラスなエピソードだ。

さて、日本人学校は日本から派遣された五人の先生で運営されてきた。時たかも人半正芳首相の死で鈴木善幸首相に変わった頃で日本人学校も管轄が外務省から文部省に移管された。開かれた日本を旗印に日本人学校も校長の裁量で運営できる部分が増えた。その一つが日本国籍でなくとも入学を受け入れたこと。ラスバルマスでも国際結婚の子弟が入学、日本語のできない子どももいた。

「日本からやってきている子と現地の子との学力が極端に違いますし、日本語の読み書きをどう教え

現地校との交流も行われ、同校では幼稚園から高校まである私立校の授業に学年ごとに参加、同規模の学校との児童会同士の交流も盛んだった。

現地の学校は日本の教育委員会によって運営されている。校区は含めてPTAの上部團体的な運営で行政組織がなく、財政も委員会で運営されている。校区はなく、自分で通う学校を選べるし、昼食も学校で給食をとるか自宅へ帰って食べるかという契約制といつたように、義務教育においても選択の幅が与えられている。

お祭り好きのスペインらしく、

フィエスタと呼ばれるお祭りは盛大に行われる。日本人学校もこれに積極的に参加、日本のお祭りの神輿や大うちわを製作。日本から法被を取り寄せての本格的な趣向で

フィエスタを盛り上げた。法被の輸送については日本航空の全面的な協力を得たことから、大うちわのデザインはJAのマークを入れた。カナリア諸島へは、成田からシンカレッジ、ランクフルト、バルマスへという遠隔地。「二十代で貴重な体験をさせてもらいました」と約二十年前を思い起す。